

〔論説〕

## 経営学の学問性についての一考察

—経営経済学と管理学—

野 末 英 俊

1. はじめに
2. 資本主義の発展と経営学
  - (1) 資本主義の発展
  - (2) 企業の大規模化と経営者
  - (3) 経営学の成立
3. 経営経済学と管理学
4. 経営学の独自性の問題
5. むすび

### 1. はじめに

今日、経営学がいかなる学問で、現代社会に対して、どのような役割を担い、どのような貢献を求められているのか。この問いに対する、答えが求められている。片岡信之は、『経営経済学の基礎理論』（1973）の中で、「まことに経営学がたんに一時的な泡沫ではなく地についた科学として成長するためには、経営学が何を問題としそれをどう見るのか、つぎつぎと出てくる新しい現象に一貫した説明をなしうる基礎的体系はどうあるべきなのか、等々が絶えず問われ

る必要があるように思われる」<sup>(1)</sup>としているが、今日の経営学の存在意義を問われている昨今、改めて問い直す必要がある。経営学は、研究者による分業化が進展し、研究分野が細分化する一方、その相互関連と経営学の全体像が理解しにくい状況がみられる。今日、これらを体系化し、経営学の学問的体系、社会的な位置づけと役割を、社会に示す必要がある。

19世紀のイギリスにおける市民革命によって、土地制度を基盤とし、身分制度を特徴とする封建制度が崩壊し、新たに成立した資本主義においては、資本家が新たな社会の支配者として登場した。資本家は、財産を基盤とし、労働力以外に何ももたない労働者を支配し、両者の間に階級闘争を繰り広げられた。マルクスが『資本論』を著した、19世紀の半ばは、まさしくこうした時代であった。

しかし、株式会社制度を基盤とした、資本の集積・集中と、その結果としての企業の大規模化、株主の分散化によって、資本家は、支配者の地位から後退し、他方、企業組織の大規模化・複雑化とともに経営者が大企業を支配するようになった。自由資本主義から独占資本主義の時代への転換とともに、経営者が出現し、科学としての経営学の必要性が必要とされるようになった。19世紀後半から20世紀への転換期は、まさしくこうした時代であった。こうした中で、ドイツ経営経済学とアメリカ管理学が生成し、ドイツ経営経済学は、企業そのものを主な研究対象とし、ここでは、経営学を経済学の一分野と位置づけた。他方、F.W. テイラーを起源として、アメリカ管理学を中心とする研究分野が生成・発展した。こうした状況下で、経営学の中に、二つの潮流が生じることとなり、一つの体系的学問としての形成を困難とした。しかし、経営学が学問として成熟化する過程の中で、その体系化は不可欠となっている。社会科学の中で、経営学の独立した位置づけが必要となっている。現代は、経営学が一体、どのような学問であるのかを問い直す必要が生じる。

戦後の日本で大きな影響力をもったマルクス経済学においては、アメリカ管理学は、体制維持的とみなされる傾向があった。マルクス主義においては、資

本主義を歴史的な存在として位置づけ、将来的に社会主義体制への移行が必然であるとする公式の中で、アメリカ管理学（論）は、批判の対象になることが多かった。しかし、1989年の東欧革命を契機として、社会主義体制が内部崩壊し、世界の資本主義化が進展し、市場経済によって、世界が一体化する中で、マルクス主義の公式は、説得性を減退させ、アメリカ管理論の影響力は高まっている。

市場経済は、地域の共同体を、商品化された物資・サービスによって代替することによって分解し、他方、商品を手に入れるために貨幣の役割は、一層重要となる。貨幣を手に入れるために、労働者は、自らがもつ唯一の財産（商品）である労働力を労働市場の持ち込み、これを企業に売ることによって、生活の維持に必要な貨幣を獲得する。家庭内の女性労働力もまた、労働市場に投入される。マルクスが指摘したように、商品経済の一般化、これは、現代まで継続する現象である。<sup>(2)</sup>

他方、利潤をもとめる企業は、熾烈な競争を市場において展開し、必然的に、勝者と敗者を生み出す。市場における競争の勝者は、資本の集積・集中を進展させ、独占的な大企業が形成される。資本主義経済においては、貨幣は、一層重要を増し、企業は利潤を目的として、資本運動を繰り返す。企業は、存続するために利潤を必要とし、利潤は大きいほど企業経営は安定する。しかし、大企業は、複雑化した組織を調整し、維持することが、新たな取り組むべき課題となった。こうして複雑化した組織を調整するには、もはや一部の資本家によっては無理であり、複雑化した組織を調整し、維持・発展させる機能を担う専門家である経営者が必要とされるようになった。

19世紀のアメリカにおいては、巨大な国内市場を背景として、巨大企業が形成されるようになり、とりわけ、広大な国土を結びつけるために、鉄道業は企業規模が拡大し、巨大企業が形成された。19世紀半ばのアメリカにおいては、鉄道企業において、複雑化した企業組織を調整する機能担当者として経営者が出現した。鉄道業は、電信会社とともに、アメリカにとって、最初の近代企業<sup>(3)</sup>

であった。アメリカの鉄道会社においては、資本家が、複雑化した組織を調整することは困難で、資本家ではなく、経営者が企業の支配者として台頭した。経営者は、財産ではなく、地位と能力を存立基盤とし、大規模で複雑化した組織の調整機能を担う。また、経営者は、コツやカンのみで、大規模な組織を維持することは困難となり、合理的な、科学としての経営方式を必要とするようになった。こうした状況を背景に、20世紀初頭、F.W.テイラーが登場した。

現代は、資本家の地位が後退し、資本主義経済の基軸を担う大企業においては、最高意思決定機関である株主総会が無機能化し、大企業を実質的に支配するのは、取締役会であり、経営者である。現代は、地位と能力を基盤とする経営者が大企業を支配する時代となり、経営者の機能は、組織の維持である。

19世紀後半から20世紀への転換期に、資本主義は、独占資本主義の段階へと移行した。この過程で、銀行資本（金融機関）が、資金供給において、重要な役割を担うようになる。ここでは、銀行資本による産業資本の支配がみられる<sup>(4)</sup>が、独占企業は独占利潤を内部蓄積することによって、銀行資本の支配から脱することになる。<sup>(5)</sup> 現代経済の中で、中心的な位置を占める独占的大企業を支配するのは、地位と能力に基盤をおく経営者である。現代は、大企業を中心に、多様な組織が複雑に入り組む多元的組織社会となり、こうしたさまざまな組織を調整管理し、維持する機能を担うのが経営者である。こうして、経営者の役割が増大し、組織の維持機能としての管理は重要な意味をもつようになる。

こうした、独占資本主義への移行、企業の大規模化が、F.W.テイラーが出現する背景であった。大規模組織は、合理的な管理（調整）を必要とする。

他方、マルクスの『資本論』に立脚し、大企業の経営を労働者の視点から批判的に検討していこうとする立場がある。大企業の経営の構造を分析し、その諸矛盾を解明しようとする。このように、経営学においては、研究分野が細分化され、より特化している。これらの分化した諸領域を調整し、体系化する作業が必要となっている。今日、さまざまな研究対象の細分化が進展する中で、経営学を一つの体系をもった学問として、他の社会科学に対して、自立したも

のとして構築することが求められている。現代の資本主義は、企業、とりわけ大企業を中心とし、展開されている。ここで、企業は、資本の運動を繰り返し、利潤を目的として事業活動を展開する。企業は、存続するために利潤を必要とする。企業は、資本の論理が貫徹し、貸借対照表の原理を逸脱することはできない。企業は、利潤と内部蓄積によって、より安定的な経営が可能となる。企業は、社会において必要な物資・サービスを商品として生産する。他方、企業の雇用によって労働者とその家族の生活の維持は可能となる。企業の納める税金によって、社会的サービス（公共事業や教育・医療）が行われ、大企業の衰退・破綻は、地域の衰退をもたらす。資本主義の中で、生成・発展した大企業が、経済の中で、その存続は、不可欠となっている。大企業をはじめとする組織の維持および管理の重要性が高まっている。

## 2. 資本主義の発展と経営学

### (1) 資本主義の発展

17世紀のイギリスの市民革命を契機として、土地と身分制度に基づく封建体制が崩壊し、自由な経済活動が可能となる資本主義が成立した。こうした中で、資本主義を分析対象とする経済学が生まれた。アダム・スミスの『国富論』(1776)が、その嚆矢である。個人の利己心に基づく自由な経済活動が、「見えざる手」<sup>(6)</sup>によって、自動調整され、社会の利益を促進する、というのが、その主張であった。

しかし、資本主義は、法的な自由・平等を実現したが、実質的（経済的）な不平等を生み出した。資本主義の発展とともに、個人企業は、市場における企業間競争を通じて、資本の集積・集中を繰り返し、企業間競争の勝者は、独占的大企業へと成長した。他方、こうした、資本主義経済の矛盾の克服を理念として、生産手段の公有化と計画経済を柱とする社会主義体制が形成された。

資本主義は、マルクスが、「資本主義的生産様式の支配的である社会の富は、

『巨大な商品集積』として現れ、個々の商品はこの富の成素形態として現れる」<sup>(7)</sup>と指摘したように、商品経済が一般化する体制であり、利潤を目的として、自由な経済活動が行われる。利潤を目的とした企業間競争の中で、競争に勝利した少数の企業は、資本蓄積を進展させて、独占の大企業へと成長・発展する。19世紀から20世紀への転換期はまさしくそうした時代であった。とりわけ、独占の形成は、巨大な国内市場を背景とするアメリカで顕著にみられた。レーニンは、こうした市場を求める独占企業の活動が、資本主義列強帝国主義をもたらしたと把握した。<sup>(8)</sup> マルクス主義の立場からは、歴史的存在としての資本主義は、最終的には、その矛盾が激化して崩壊するという公式のもとに展開される。ここでは、資本主義経済の中心に位置する独占企業の経営の構造を分析し、これを批判的に検討されることになる。資本主義の発展とともに、階級闘争は激化し、その内部における諸矛盾（恐慌・失業・貧困・労働疎外・公害）が高まり、資本主義は、最終的に崩壊する。その次に位置づけられる体制は、生産手段の公有化と計画経済を柱とする社会主義であり、社会主義においては、経済的不平等が存在せず、計画経済によって、市場の無政府性を克服できるとした。1930年代の世界恐慌の際、ソ連が順調に経済発展を遂げ、第二次世界大戦後、東欧諸国が社会主義化し、1960年代後半には、アメリカがベトナム戦争で敗北が明確化しドルの国際的威信が損なわれた。こうした状況をもたらす資本主義に内在する矛盾の分析と必然的な崩壊の論理、これが、マルクス経済学の基本視角であった。<sup>(9)</sup>

しかし、転機は1970年代初頭であった。ベトナム戦争の終結を図るアメリカは、ベトナムの背後にいる中国と接近を図り、中国もまた、中ソ対立を背景として、資本主義諸国に接近した。他方、ソ連は、計画経済と集権的な官僚制の弊害が拡大し、重工業・軍事優先政策は、消費財の不足を生み、労働者の勤労意欲を高めることができなかった。1980年代には、中国の市場経済化が進展し、ソ連においては、ペレストロイカが行われ、世界の市場経済化が一気に進展した。他方、資本主義諸国においては、新自由主義に基づく、自由経済化が進展

した。縮小する資本主義、拡大する社会主義という構図は逆転し、1989年の東欧革命を契機に社会主義体制は内部から崩壊し、世界の市場経済化が一気に進展した。現代は、多国籍企業を中心として、一元化されたグローバル市場をめぐって、熾烈な企業間競争が行われている時代となった。ここでは、商品化が一層進展し、貨幣の重要性はますます増大する。

1970年代には、第二次世界大戦後の世界経済の変化が明確化しており、資本主義は、二度の石油危機によって、経済成長が鈍化した。社会主義においても、体制の内部対立、計画経済の限界、官僚制の問題（抑圧・勤労意欲の低下）が明確化するようになった。この結果、1989年の東欧革命を契機として、市場経済が支配的な体制（資本主義）へと一元化された。資本主義を歴史的な体制と把握し、資本家と労働者との階級闘争に労働者階級が勝利して、社会主義の時代が到来するという図式は崩壊した。資本主義は、市場をめぐる企業間競争の世界であり、熾烈な競争が展開されている。こうした中で、いかに複雑化した企業組織を維持するかが重要な課題となっている。

資本主義においては、利潤（貨幣）を目的として、企業間の自由な経済活動が行われ、貨幣蓄積が図られる。利潤は、企業の存続において、不可欠である。競争に勝ち残った少数の企業は、資本の集積・集中を進展させ、独占的大企業へと成長・発展する。現代は、少数の独占的大企業を中心に、市場が支配されている。また、商品経済の一般化は、資本主義が成立して以来、現在まで継続する現象である。ここでは、利潤（貨幣）を求める資本の運動が繰り返される。資本主義の発展の中で、企業間競争の勝者は、資本蓄積を進展させ、一部の企業は大規模化し、独占的大企業となり、市場の支配を行うようになった。

## (2) 企業の大規模化と経営者

17世紀のイギリスの市民革命を契機として、資本主義は始まった。土地と身分制度を特徴とする封建体制が崩壊して、財産権が保障され、自由な経済活動が可能となる資本主義が成立した。ここでは、財産を基盤とする資本家が、労

働力以外に何ももたない二重の意味で自由な労働者を雇用し、利潤を目的として、事業活動を展開し、資本蓄積を進展させた。

企業は、市場において活動し、競争に勝ち残った少数の企業は、資本の集積・集中を進展させ、独占的大企業へと成長・発展を遂げた。このことは、国内に巨大な市場を有するアメリカにおいて著しかった。19世紀後半には、アメリカ・ドイツなどの後発国において、資本主義が発展し、アメリカにおいては、巨大な国内市場を背景に、独占的大企業が市場を支配する独占資本主義と呼ばれる状況が生じ、1901年に成立したUS スチールの成立は、その象徴的事件であった。こうして、自由資本主義から、独占資本主義段階に移行すると、企業が大規模化し、複雑化した組織をいかに維持・発展させるかが、重要な課題となった。ここでは、株式の分散化にともなって、資本家が後退し、経営者の役割が重要性をもつようになる。

しかし、資本主義においては、株式会社制度を基礎として、資本蓄積・集中によって、企業規模が拡大し、企業の内部組織は大規模化し、複雑化した。この組織を調整・維持することが課題となり、組織の調整の役割を担う経営者を生み出した。<sup>(10)</sup> こうして19世紀から20世紀にかけてのアメリカにおいて、自由資本主義から独占資本主義への移行が進展した。他方、19世紀においては、労働者の労働強化や労働時間の延長など、資本家は労働者の犠牲の上に、資本を蓄積し資本主義的諸矛盾の克服を目指す理論として、社会主義が生まれた。1917年には、レーニンを指導者として、世界最初の社会主義国家ソ連が誕生した。第二次世界大戦後、社会主義は大きく勢力を拡張し、東欧諸国の社会主義化によって、社会主義諸国は、世界を二分する勢力をもつようになり、冷戦と呼ばれた。1960年代後半から、1970年代前半にかけてのベトナム戦争とアメリカの敗北は、社会主義の正統性と資本主義体制の凋落を象徴するものであった。しかし、社会主義においても、その内部矛盾が拡大し、体制内部の対立、重工業重視と消費財の不足、官僚制による新たな格差、労働者の勤労意欲の低迷などの諸問題が拡大した。



1970年代後半には、中国における市場経済化、イギリスのサッチャー政権の新自由主義への転換など、計画・統制経済から、自由経済への転換が進展し、1980年代には、ソ連におけるペレストロイカなど、計画経済の見直しと、市場経済化が一気に進展した。しかし、計画経済の修正には限界があり、社会主義体制は、資本主義以上に矛盾の大きな体制となり、1989年の東欧革命を契機に、短期間のうちに、社会主義体制は内部から崩壊した。ここで、社会主義の理論(理想)と現実の乖離について、厳しく問わなければならない。社会主義諸国は、再び資本主義へと移行した。現代においては、貨幣は一層重要となり、利潤を求めて事業活動を海外展開する多国籍企業によって、熾烈な競争が展開されている。同時に、資本主義の内部に資本の論理とは異なった論理をもつ企業組織を中心とする多様な組織が成長し、財産を基盤とせず、地位や能力に存立基盤をおく経営者の役割が高まっている。企業のみでなく、行政・病院・学校などの領域において、多様な組織を成長し始めた。こうして、資本主義の内部に多元的な組織社会が形成され、こうした組織をいかに維持するかは、現代社会において、決定的に重要性をもつことになった。

封建体制が崩壊して、二重の意味で自由な労働者階級が出現した。資本主義は、自由資本主義から、独占新資本主義へと発展し、独占企業と国家が結合した、国家独占資本主義と呼ばれる段階に入った。しかし、1970年代後半から変化がみられるようになり、計画より、市場の機能がより重視されるようになった。こうした、市場経済の一般化は、今日まで続く現象である。しかし、市場における競争に勝利した大企業は、独占的な地位を占めるようになる。しかし、資本主義の発展とともに、企業は株式会社制度を基礎として、しだいに規模を拡大し、独占的大企業が市場を支配する経済体制へと変化した。同時に、企業規模の拡大は、必然的に、組織の複雑化をもたらした。

こうした企業規模の大規模化＝独占資本主義への移行を背景として、20世紀初頭には、F.W. テイラーを起源とするアメリカ管理学が生成した。テイラーの科学的管理法は、課業管理と「計画と実行の分離」を柱とするものであった。

テイラー・システムは、生産性向上の結果として、「対立から強調へ」を理念としたにもかかわらず、労働者の主体性を奪うもので、労使対立の要因を含んでおり、多くの批判の対象となった。<sup>(11)</sup>しかし、従来のカン・コツではなく、管理に科学を適用しようとするものであり、科学としての経営学の成立において画期となった。

現代の経済は、独占的大企業が市場を支配する体制であり、この複雑化した組織を調整する機能の担当者として、経営者が出現した。企業組織を中心とする組織の大規模化・複雑化によって、これを維持・発展することが、社会にとって、重要となるに及んで、組織に対する理解、組織を維持する管理機能の分析が、社会にとっての重要な課題となった。そして、この組織の維持・管理機能を担うのが経営者である。経営者は、地位・能力をその存立基盤とする。<sup>(12)</sup>

資本主義が、自由資本主義から独占資本主義段階に移行すると、大規模化・複雑化した組織の維持・調整が重要な課題となった。この機能は、資本家ではなく、経営者が担うことになった。こうして、資本家に代わって、大企業の支配者として、経営者が台頭すると、資本家と労働者の二大階級を軸とする階級闘争の図式は、あいまいとなった。他方、大規模化し、複雑化した組織の調整の問題は、決定的に重要となった。資本主義の発展とともに、市場における間競争に打ち勝った企業は、資本の集積・集中を進展させて、企業規模を拡大する。同時に、企業組織は拡大・複雑化し、これを調整・維持する機能が重要となる。この複雑化した組織を維持する機能が管理であり、これを経営者が担う。

### (3) 経営学の成立

19世紀末から20世紀初頭にかけて、企業を対象とするドイツ経営経済学が形成された。経営経済学は、企業を主な対象とするものであった。他方、20世紀のはじめ、F.W. テイラーが科学的管理法を主唱し、経営学の父と呼ばれた。F.W. テイラーの主張の二つの柱は、課業管理<sup>(13)</sup>と「計画と実行の分離」<sup>(14)</sup>であり、計画部門を労働者から切り離し、一か所に集中する必要を唱えた。これによっ

て、それまでのカンやコツとは異なる、もっとも高い生産性を達成しようとするものであった。テイラーの科学的管理法は、工場における作業労働を対象とするものであったが、こうした作業の量・方法などについて、それまでのコツ・カンに代えて、科学を適用し、最大限の生産性を実現しようとする。ここでは、作業に最も合理的な方法を適用することが重要となる。しかし、計画と実行の分離は、労働者の疎外感を高める。労働者の主体性が奪われ、労働者の勤労意欲は低下する。この状況を乗り越える意味で、人間関係論や組織の存続を均衡<sup>(15)</sup>で説明するバーナード理論へと展開をみることになった。しかし、他方において、経営学は、学問として複雑な様相を示し、「マネジメント・セオリー・ジャングル」<sup>(16)</sup>と呼ばれる様相を示すようになった。

### 3. 経営経済学と管理学

1917年にレーニンがロシア革命を指導し、世界で最初の社会主義国ソ連が誕生した。社会主義は、第二次世界大戦を契機に、資本主義諸国と世界を二分する勢力をもつようになり、戦後、さらに影響力を拡大した。マルクス経済学の立場からは、資本主義は、その諸矛盾の激化によって崩壊し、社会主義への体制転換が行われると、公式化した。しかし、1980年代には、中国の市場経済化、ソ連のペレストロイカに見られるように、社会主義諸国においても計画経済の見直しと自由経済への修正が試みられたが、1989年の東欧革命を契機として、社会主義体制は、短期間のうちに、内部から崩壊した。

マルクスの『資本論』は、資本主義の構造を分析する。マルクスによってなされた資本主義の解明は、現代においても根底において有効性をもつ。しかし、資本主義は、その発展の過程で、さまざまな要因を加えて変容を遂げつつある。

特に、資本主義の歴史的な発展の中で、自由資本主義の時代から、独占的大企業が市場を支配する時代となり、企業組織が大規模・複雑化すると、資本家が、大規模化した組織を調整することが困難となり、財産を基盤とする資本家

とは異なり、地位と能力を基盤とする経営者が必要とされるようになった。株式会社制度を基礎とする資本の集中と株式の分散化、大株主の後退は、大企業の所有者である株主が無機能化し、経営者が大企業の支配者として台頭した。

こうして、資本主義の初期には支配的であった資本家と労働者の対立はあいまいなものとなり、資本家に代わって、経営者が大企業の支配者として対当した。企業規模の拡大は、大規模で複雑な組織を生み出し、こうして生み出された組織をいかに調整するかが重要な課題となっている。

株式会社制度を基礎とする、企業の大規模化にともなって、企業にとって必要な資本は、巨額となり、株式の分散と株主の増大、大株主の後退によって、資本家の地位が低下し、財産とともに、知識・能力が重要性をもつようになり、経営者の支配力が強化された。経営者は、企業組織を維持する管理の機能を担う。

経営経営学の立場に立つ研究者は、経営学を、経済学の一分野とみなす。資本家は、資本の増殖を目的として事業展開を行うが、ここで、資本家は、購入した労働力が生み出した剰余価値の拡大に最大の関心を向ける。労働者を犠牲にした、富の蓄積こそが、最大の関心であった。この結果、資本家と労働者の対立は、決定的なものとなる。この立場に立って、批判的に企業経営を分析する立場（批判経営学）の研究者は、労働者の立場に立った視角からの企業経営の分析を進展させ、したがって、企業経営（管理）を批判的にとらえる。

これに対して、アメリカ管理論は、F.W.テイラー、バーナードの流れをくむものである。F.W.テイラーの科学的管理法は、資本主義経済体制の中で、独占的大企業が支配的となりつつある時代に出現した。それまでのコツやカンにおける経営によっては、巨大な独占的大企業の合理的な経営を行うことは困難となった。社会の中に、企業組織をはじめとする多様な組織が形成され、経営者の担う職務である管理に科学を適用する必要（必然）性が生まれた。<sup>(17)</sup> 経営経済学と管理学は、別々の学問として発展し、経営学の2つの潮流として独自に発展した。しかし、今日、経営学の学問性が問われており、研究の分業

化が進展し、研究対象が細分化している中で、これを一つの学問として体系的なものとして構築づける必要性が高まっている。ここで、批判経営学の立場に立つ研究者は、マルクスをよりどころとして、企業の事業活動を個別資本の運動とみなし、これを分析しようとする。ここでは、資本主義のもたらす諸矛盾(独占利潤、搾取、労働疎外)が問題となる。資本家が労働者の生み出した剰余価値を搾取するという理論は、必然的に、大企業の管理に対する批判的な分析を生み出した。資本主義体制における搾取、労働疎外、転倒性などの問題についての論理が展開された。1917年のレーニンの指導するロシア革命は、生産手段の公有化を実現し、計画経済によって、社会主義に基づいて経済発展を実現しようとするものであった。第二次世界大戦後、東欧諸国が社会主義化することによって、社会主義体制が資本主義と世界の勢力を二分するまでに成長し、この傾向は、1960年代後半から、1970年代前半におけるベトナム戦争におけるアメリカの敗北によって、頂点に達した。1970年代前半の国際通貨としてのドルの動揺がこれに拍車をかけた。ここでは、資本主義から社会主義への移行が現実視された。

しかし、1970年代には、中国と資本主義諸国との接近、1978年の中国の市場経済化への転換、79年のイギリスのサッチャー政権による新自由主義政策によって、歯車は、逆転しはじめた。1980年代半ばには、旧ソ連によるペレストロイカが行われ、1989年の東欧革命を契機として、社会主義体制は内部から崩壊し、再び資本主義化した。現代においては、世界の資本主義化が進展し、他方、大企業の社会における役割は大きくなり、労働者の雇用、国・政府への納税、金融機関への利払い、株式への配当など、ステークホルダーへの影響はますます大きくなっている。大企業の破綻は、失業者の増大、下請企業の破綻、地域社会の衰退など、きわめて大きな社会的影響をもたらす。この結果、政府(国・地方政府)は、大企業の破綻を極力回避しようと努める。こういして、大企業は、現代社会にとって不可欠な制度となる。ここでは、企業組織の維持が重要な課題となる。経営学が、経済学をはじめとする他の社会科学に対して、独立した

学問であり、その自立性を主張するには、経済学からの独自の性格をもつ、管理学を中心に、学問体系の構築を図ることが現実的である。資本主義の発展の中で生成し、成長した組織の維持を機能とするである管理学を中心的な対象とすれば、経営学は、経済学に対して学問的独立性を保つことができる。資本主義の発展の中で生成し、社会の中で、決定的に重要性をもつようになった、組織の維持を担う管理学を経営学の中軸にすえ、経営経済学がフレームワークを提供する。こうした学問体系の構築が、最も現実的のように思われる。管理学は、経済学とは、別の領域であり、ここに、経営学（管理学）が経済学から独立した学問として存続できる根拠がある。

#### 4. 経営学の独自性の問題

これまで、批判経営の立場をとる研究者は、マルクスの『資本論』に立脚し、資本主義から社会主義への体制移行の必然性の公式の中で、企業を個別資本の運動として理解した。ここでは、現代の大企業の経営を批判的に理解する。とりわけ、大企業における労働力の管理について、資本家による剰余価値の搾取の観点から、解明しようとする。しかし、今日においては、資本家の地位が後退して、経営者が社会の支配者としての地位を占めるようになり、マルクスの時代と比較して、資本主義は変容している。社会の中心に位置する大企業において、地位や能力を基盤とする経営者支配がはじまったことは、知識が財産（貨幣）と並んで、重要な経営資源となってきたことを示している。今日では、企業組織をはじめとして、さまざまな組織が成長している。まさに、ドラッカーのいう多元的組織社会である。こうした組織の維持は、社会の存続上で、重要な課題となっている。こうして、現代の資本主義において、組織の維持が重要な課題となり、管理が重要な役割を担うことになる。この管理機能を担当するのが経営者である。近年、経営学の学問性と存在の意義が問われており、経営学が、社会に対する貢献を明示し、社会科学の中で、自立した学問体系をもつ

学問として、存立・発展しないかぎり、その将来はない。経営学が経済学や他の社会科学から相対的でなく、絶対的な独立性を主張する必要性が高まっている。経営学が、体系的、統一性をもてない状況が続いてきた。三戸公は、マルクスを基礎とする経営経済学の研究に始まり、途中からドラッカー研究に転じたが、経営学は、管理学であり、組織維持をその機能とし、経済学とは、別物であるとしている。こうした理解は、経営学が経済学からの独立性をもつ上で、有用と思われる。

## 5. むすび

市民革命の結果、資本主義が成立し、企業による自由な経済活動が行われるようになった。同時に、資本家と労働者の二大階級が成立した。ここで、労働者は、唯一の財産である労働力によって、社会的に必要な物質を生産し、価値を作り出す存在でありながら、自らが生み出した価値を自分のものとするのができず、資本家が労働者の生み出した剰余価値を収奪する体制である。ここでは、生産の無政府性や市場の狭隘さを原因として、恐慌が繰り返され、その都度、大量の失業者が生み出された。初期資本主義初期の資本蓄積の貧しい段階においては、こうした問題が顕在化した。しかし、資本主義はこうした諸矛盾を内包しながらも、大企業が、現代社会の中で、中心的な位置を占めるようになる。大企業の存続は、現代社会の中で、決定的に重要な課題となる。現代は、市場経済化がグローバルに進展している時代である。市場経済化は、社会の隅々まで商品経済を浸透させ、共同体の相互扶助を商品に置き換えることによって解体し、貨幣の重要性が高まるとともに、個人主義が一層強まる。

また、今日においては、資本主義の中に、企業組織を中心として、多様な組織が形成され、社会にとって不可欠の役割をもつようになった。まさしく、現代は、P.F. ドラッカーのいう、多元的組織社会の様相を呈している。<sup>(18)</sup> こうした状況下においては、大企業の複雑化した組織を調整し、存続することが重

要となる。資本主義の内部で、企業組織を中心とするさまざまな組織が形成され、組織は、ますます大規模化・多様化・複雑化し、その維持・存続は、社会の中で最重要な課題の一つとなっている。経営学の存在意義もそこに見出すことが可能となる。こうした多様な組織維持の機能が管理である。ここで経営学は、管理論学を中心に、学問の体系化を図ることによって、他の社会科学から自立した学問体系として構築することが、可能となる。

今日、経営学は、分業が進展し、各研究者が、自らの関心にしたがって、研究を進め、研究対象の細分化が進展している。ここで、研究者が研究を進展させるうえで、自らが取り組んでいる分野が、経営者の学問体系の中でどのような位置にあり、学問の発展に対して、どのような意味をもっているかを理解することは、重要である、学問の発展に貢献しようとする研究者が、自らの立場を確認することは、自らの学問を深め、発展させる上で必要である。今日、経営学が、その存立意義を問われている中で、経営学は、現代社会において、いかなる貢献ができるであろうか。現代の資本主義の現状に即し、事実を正確に理解し、その貢献面とマイナス面を正しく理解する必要に迫られている。

マルクスの『資本論』を枠組みとする現代の企業経営に対する理解は、資本主義の構造と資本の運動を対象とし、資本主義の基底を分析しようとする。この方法は、資本主義の本質を理解する上で、有用である。大企業が、資本主義体制の中心に位置するようになり、経済・社会への影響を増大させている。大企業は、雇用・納税・金融機関・株主や下請企業など、ステークホルダーへの影響力を強めている。大企業の破綻は、地域のみでなく、一国経済に影響を及ぼす。企業は、資本の運動を繰り返し、労働者は、大企業にとって資本蓄積の手段である。

研究者が自らの研究活動を行う際にも、経営学という一つの学問体系の中で、どのような位置についての研究を行っているのかという認識は、当然、必要になる。資本主義の発展とともに、企業が大規模化し、複雑化した組織が出現した。他方、社会の中に、さまざまな組織が成長し、多元的組織社会の中で、人は、



生活するようになった。この組織維持の機能の担い手として、経営者の役割は高まっている。株式会社制度に基づいて、大企業が成長したが、大企業においては、株式所有が分散化し、所有と支配の分離が進展し、資本家の地位は後退した。他方、資本所有に基づかない経営者が、大企業の支配者となった。また、大企業が、資本主義経済の中で、基幹的役割を担うようになると、経営者の役割（組織維持機能）は一層重要になった。

こうして、現代において、企業組織を中心として、多様な組織が成長し、これを維持する管理の重要性が高まり、経営者の役割が増大している。現代は、財産とともに、組織を維持するための知識や能力の重要性が高まっている。こうして、現代の組織の均衡維持<sup>(19)</sup>の問題に対して、管理が重要な機能となり、この管理機能を担うのが経営者である。この経営者の機能としての管理学によって、経営学の他の社会諸科学に対して、独自性を示すことが可能となる。現代は資本主義の中に、多元的組織社会が形成され、組織の維持が社会にとって、最も重要な課題の一つとなっている。この組織を維持する機能（管理学）を経営学の中心と位置づけることが分業が進展し、研究領域が多様化した経営学を一つの体系として構築することが、最も現実的と思われる。

### （注）

- (1) 片岡信之（1973）『経営経済学の基礎理論—唯物史観と経営経済学—』千倉書房、1頁。
- (2) 三戸公は、「われわれは、貨幣と商品なくしては生きていくことの出来ない社会に生き、貨幣・商品・資本の運動法則の外で生きることは出来ない社会に生きている。ドラッカーのいうように、現代は組織と知識の時代である。だが、組織と知識の発展は生産性の向上をもたらすが、それ自体は、資本を排除し資本にとってかわるものではない」三戸公（2011）『ドラッカー、その思想』文眞堂、194頁。
- (3) A.D. チャンドラー Jr.（1977）鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳『経営者の時代（上）』東洋経済新報社、1979年、149頁。
- (4) R. ヒルファーディング（1910）岡崎次郎訳『金融資本論（下）』岩波書店。111-112頁。
- (5) P.A. バラン& P.M. スウィージー（1966）小原敬士訳『独占資本—アメリカの経済・社会

- 秩序に関する試論―』岩波書店、1967年27頁。
- (6) アダム・スミス (1776) 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富 (三)』岩波書店、1966年、56頁。
- (7) カール・マルクス (1867) エンゲルス編、向坂逸郎訳『資本論 (一)』岩波書店、1969年、67頁。
- (8) レーニン (1917) 宇高基輔訳『帝国主義』岩波書店、1956年、112-143 頁。
- (9) シュンペーターもまた、「資本主義の非常な成功ことが、それを擁護している社会制度をくつがえし、『不可避的に』その存続を不可能ならしめ、その後継者として、社会主義を強く志向するような事態をつくり出す」J.A. シュンペーター (1942, 1947, 1949) 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社、1995年、62頁。としている。
- (10) 19世紀半ばの、アメリカ鉄道業にその起源を求めることができ、A.D. チャンドラーの研究に詳しい。「水平的企業連合から垂直的統合へという戦略の移行が、アメリカ産業に初めて経営者企業をもたらした。…経営者企業は、常勤の俸給管理者がミドル・マネジメントだけではなく、トップ・マネジメントをも支配しているという点で、企業者企業と区別される。企業を経営するのはもはや所有者ではない」A.D. チャンドラー、前掲訳『経営者の時代 (下)』720頁。
- (11) H. ブレイヴァマン (1974) 富沢賢治訳『労働と独占資本』岩波書店、1978年、140-156頁。
- (12) ガルブレイスは、組織における専門的知識集団を、「企業の指導力としては、企業家に代わって経営陣が存在するようになったのだ。…それは、集団の決定に対して専門家した知識、才能あるいは経験を提供するすべての人々を包摂しているのだ。集団によるディシジョン・メーカーに参与するすべての人々、あるいはこれらの人々が形成する組織にたいしては、今までのところ名称が存在していないので、私はこの組織を『テクノストラクチュア』と呼ぶことを提案する」J.K. ガルブレイス (1967) 都留重人監訳、石川達郎・鈴木哲太郎・宮崎勇共訳『新しい産業国家 (第二版)』河出書房新社、1972年、112-113頁。
- (13) F.W. テイラー (1903) 上野陽一訳『科学的管理法』産能大学出版部、1969年、91頁。
- (14) 同訳書、120-121頁。
- (15) C.I. バーナード (1938) 山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳『新訳 経営者の役割』ダイヤモンド社、1968年、6頁。
- (16) 経営学史学会編 (2002) 『経営学史事典 (第2版)』文真堂、6頁。
- (17) 三戸公は、マルクス経済学の立場に立って、経営経済学の研究を行い、のちにドラッカーに転じた。三戸は、経営経済学に理解を示しつつも、経営学=管理学とみなすようになった。三戸公 (2002) 『管理とは何か―テイラー、フォレット、バーナード、ドラッカーを超えて

## 経営学の学問性についての一考察

- 一』文眞堂、28頁。「人間の協働行為を対象とする学が経営学である。協働行為、協働体系はその人的・物的要因を合目的に秩序づけるものが組織であり、組織維持行為が管理である。そしてテイラー以降の現代に至るまでの管理は科学的管理であり、その発展・展開である」
- 三戸公（2000）『科学的管理の未来—マルクス・ウェーバーを超えて—』未来社、215—216頁。
- (18) P.F. ドラッカー（1992）上田惇生訳『断絶の時代—いま起こっていることの本質—』ダイヤモンド社、1999年、185頁。
- (19) C.I. バーナード、前掲訳、86頁。

